

書評

澁谷智子『ヤングケアラー—介護を担う子ども・若者の現実』

中公新書 (2018年5月刊)

澁谷智子編『ヤングケアラーわたしの語り—子どもや若者が経験した家族のケア・介護』

生活書院 (2020年10月刊)

大妻女子大学 加藤 悦雄

子どもにかかわる問題は、誰にも知られることなく、深刻化していくことがある。今回取り上げるヤングケアラーの問題も相当以前から存在していると考えられ、今でも光の届かない場所で繰り返し生起しているのではないか。そこで、国内におけるこの問題に光を当て、当事者の視点に立った問題提起に取り組む澁谷智子の書籍を2冊同時に取り上げていく。前者の新書(以下『ヤングケアラー』)では、3つの調査をとおしてヤングケアラーの実態を示したうえで、先進国イギリスで実践されているさまざまな支援策を紹介している。後者(以下『わたしの語り』)はかつてヤングケアラーであった当事者の手記であり、どのような思いを抱きながら家族のケアと向き合い、子ども期を歩んできたのか語られている。この2冊の本をとおしてヤングケアラーという課題に分け入っていくことにする。

ヤングケアラーという存在は、どのように発見されたのか。2010年に一般社団法人日本ケアラー連盟が発足し、「老老介護」や障がい児ケアなど、ケアを担う人同士で課題を共有する活動を開始する。2013年に言わば想定外の課題として、10代で祖母の介護を6年間担った末に看取った1人の若者の存在とともに浮上した。そして現在、ヤングケアラーは「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子ども」と定義されている。まず、著者のかかわった神奈川県藤沢市の調査をとおしてヤングケアラーの実態を確認していく。2016年に藤沢市内の小中学校55校1812人の教職員にアンケートを配布し、1098人が回答したが、このうち約半数がこれまでに家族のケアをしていると感じられた児童生徒がいたと回答した。回答者にもっとも印象に残る子ども1人の詳細を書いてもらい、有効回答数508件を分析対

象としている。

ケアを担う子どもは、小学校高学年から増えていく傾向にあり(小学2年生22名に対して小学6年生は85名)、女子のほうが多い(男子38.0%に対して女子は61.8%)。ケアしている相手は、きょうだいが239件、母親が212件、父親が50件と続く。家族構成は「ひとり親と子ども」が228件ともっとも多い。ケアの内容としては「家事(料理、掃除、洗濯など)」275件、「きょうだいの世話」268件、「生活をまわしていくための、買い物、家のなかの修理仕事、重いものを運ぶなど」は99件、「身の回りの世話(食事や着替えの介助、移動介助など)」83件、「感情面のサポート(ケアの受け手の精神状態を見守って言うことに対応すること、落ち込んでいる時に元気づけることなど)」67件、「請求書の支払い、病院への付き添いや通訳など」30件、「身体介助(入浴介助やトイレ介助、体拭きなど)」13件であった。教職員が気づいたきっかけ(回答数450件)は、子どもが「今日のごはん何にしようかなあ〜」と話していたなど「子ども本人の話」が206件ともっとも多いが、子どもがケアをしている期間については「知らない」という回答が403件(79.3%)を占めた。子どもの学校生活の影響(回答数497件)としては、「欠席」286件、「学力がふるわない」212件、「遅刻」201件、「宿題をしてこない」141件、「忘れ物」134件と続いていく。なお、イギリスと比較するとケアの内容として「きょうだいの世話」の割合が極めて高いが、日本ではおとなが長時間賃労働に従事している結果、家の中で子どもが世話をしている可能性を指摘している。

『わたしの語り』には、中学3年生から「多系統萎縮症」という難病の母親をケアしてきた宮崎さん、物心ついた頃から「高次脳機能障害」の母親をケアしてきた高橋さん、小学校低学年の頃から進行性の病気を発症した妹をケアしてきた沖さ

ん、16歳の時から認知症の祖母をケアしてきた秋保さん、両親がろう者で会話のほとんどない家庭で成長してきた遠藤さん、大学生の時に母親が精神疾患を発症し、介護を離れていた時に母の自殺に直面した名倉さん、小学生の時に母親が「多発性筋炎」という免疫疾患を発症し、24年間ケアしてきた高岡さん、それぞれの内面を含む経験が綴られている。終わりの見えにくい家族のケアに多くの時間を費やし、子どもらしい時間を奪われることになり、自分自身のこと（現在／未来）を後回しにしたり、諦めてきたことに気づかされる。しかし、子どもの限られた世界ではそれは特殊な体験であるがゆえに、友達や先生に自分の状況や気持ちを伝えることは難しい。宮崎さんは「『介護』という言葉を口にした瞬間、その場の空気が暗くなってしまう」と考えて、沖さんは妹のことを話すと「その場は一気に暗いムード」に変わってしまうし、小学校高学年の頃に「『シンショー』という障がいのある方をいじるような言葉」が流行っていたため、友達との関係性に神経を尖らせてきた。

それでは、ヤングケアラーの心の中に湧き上がる感情や語られなかった思いはどこに出口を求めなのか。高橋さんはいつしか一切の疑問も感情も抱かない「戦法」を編み出す一方で、“叫ばなければやりきれない思い”をノートに綴り続けていたという。最近になってようやく、捨てずにとっておいたノートの言葉と出会いなおすことで、「感情と共に生きていく必要」、すなわちつらいと感じる原因やポジティブな感情に気づくことができるようになった。澁谷は「多くのヤングケアラーは、ケアをマイナスのこととしてのみ捉えてはいない。少なくとも、家族のケアをすることを『必要なこと』あるいは『意味のあること』と考えていたからこそ、自分に課せられたケア責任を放り出さずに、それを長年担ったという実態がある」という。

発見しづらいヤングケアラーとつながり、その生き方や努力を認めながら、重すぎる負担や孤独を軽減するにはどうすればいいのか。ふたたび『ヤングケアラー』をとおして、「子どもの権利」

を根拠に支援を展開するイギリスの取り組みを見ていく。まず、子どもの視点に立って課題を捉えるための3種類のアセスメントシート、すなわち、①ケアの仕事の内容と頻度を客観的に捉えるシート（チェックリスト形式）、②ヤングケアラー自身が誰かをケアすることについて感じていることを捉えるシート（チェックリスト形式）、③ケアに使っている時間と、好きな作業と嫌いな作業、ケアによる学校の欠席や遅刻の状況を捉えるシート（記述形式）が紹介されている。ケアの多面性を客観的かつ個別的に捉えることが可能となっており、例えば②のアセスメントシートは、「ケアをすることで、よいことをしていると感じる」「ケアのために、家族の絆が強まったと感じる」「ケアのために、とても孤独だと感じる」「ケアのために、自分のことはあまり気にかけていない」など20項目について、「まったく感じない」「時々感じる」「よく感じる」の選択形式となっている。

『わたしの語り』において、名倉さんが「ピアグループと傾聴してくれる大人」の2種類の人が出てくれたら心強かった、さらに高岡さんは「もし親身に話を聞こうと歩み寄ってくれる大人が近くにいてくれたなら、ありがたかった」と語っているが、イギリス・ウィンチェスターの実践は、こうした当事者の思いにどう応えるとよいか教えてくれる。例えば、「ヤングケアラーが信頼できる大人と1対1で出かけ、仲良くなるなかでいろいろな相談をする」サポート方法である「ビフレンドリング（味方になること）」、普段なかなか出会えないヤングケアラー同士で体験を話し合う活動はもとより、おやつ作りやマニキュア塗り、アスレチックや乗馬体験など、子どもが楽しむことのできる多彩なプログラムについて、その展開過程を含め紹介されている。

新型コロナの流行によって、わたしたちは知らず知らずのうちに子どもに我慢を強いてしまっている。その結果、葬り去られようとしている子どもの感情を救い出し、子どもとともに課題と向き合うことが問われている。この2つの本にはその手がかりが数多く含まれている。